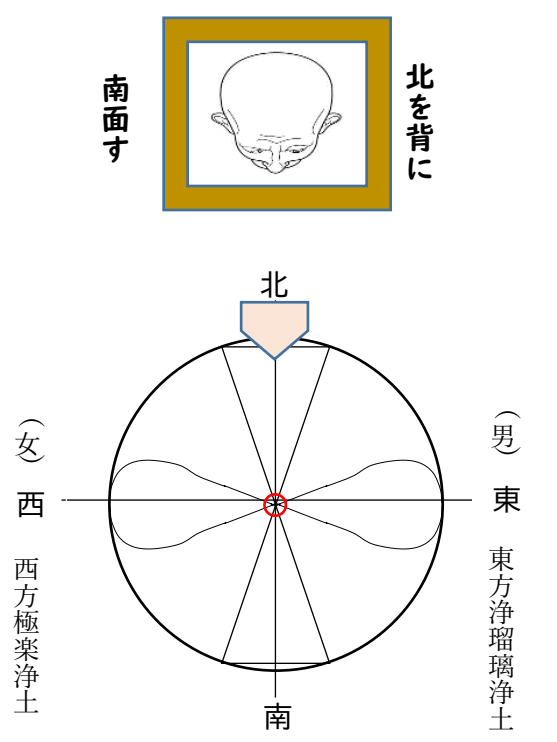
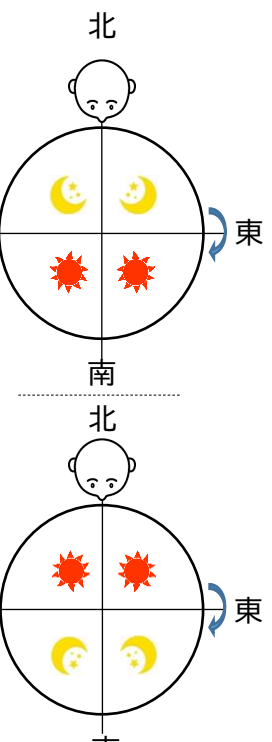


中国伝来の思想が日本仕様に融合し、日本文化に様々な影響を及ぼしたとされる「^{さじょう う げ}左上右下」思想を取り上げる。「左上右下」を「左尊右卑」という人もいるようだが、左上右下の根源的思想——宇宙の自然法則「陰陽二元相対（^{そうたいせい}待）性原理」を踏まえれば、対比的であっても、本来は差別的・優劣的な上下を意図したものではないはずである。しかし、・・・。

第Ⅰ部 基本のこと

1. 「北を背に南面す」

元々は中国の古代思想や政治哲学に由来する「天帝（天子、君子）は北辰（北極星）に座して南面す」にある。まずは二人の識者の一説を取り上げて図(表)－**1**に記載する。日本文化は、日本の古層にあった東西軸神聖視の思想に、陰陽五行思想等中国文化の影響下、南北軸思想を交差させた意義付けが図られ、統治機構に活かして来たという歴史があり、これらを概念図化したものである。

民俗学者の吉野裕子著「隠された神々（河出文庫）」等より	宗教学者の山折哲雄著「新・四国遍路」（PHP新書）等より
天中不動の星、北極星を中心とする部分（北斗七星を含めた所）を中宮と称し、特に北極星を神霊化して最高の天神「天帝・太極・太一・太子・天子」と称した。したがって、天帝太一というのは北極星を背負って南を向き政治を行うのが一番良い（安定する）とされて、南北・垂直軸が重要視されて来た。	日本は農耕社会ですから『太陽』と『月』の恵みを中心に世の中を考え、統治するという仕組みが出来ていた。そのため、東西の軸を大切にした。一方、中国大陸では、天帝（天使）というのは北極星を背負い、よって南を向いて政治をするとして、北極星を中心とした南北の軸に基づく世界観が優勢であった。
① 	②  ③ 太陽は東から上って西に沈む、沈むとは籠るとも言える、その籠るとは今度は東へ上るための休息（翌日活動に備えてエネルギーを熟成すること）である。また、日中の太陽は夜には月に変化して夜を統べるとも言い換えられる。太一（太極）は北を背にして宇宙を見ているということは、消長循環（エネルギーの蓄蔵と放出）の統御・差配を担っているのだ、とも見做せる。

⑥の上下二つの意味合いは、太陽が出ている時は月は隠れ、月が出ている時は太陽が隠れているということを対照化したもの。あるいは、回転の動を重ねた静に等価転換したものともいえる。太陽は東から上って西に沈むことから、ジェンダー性では、種を運ぶ男を東に、その種を待ち受ける畑の女を西に配当している。⑥の上下二つの図柄を重ねてイメージすると、太陽は太陰に、逆に太陰は太陽に入れ替わるということは陰陽の重なり・交感交合に結び付いて行くことになる。

北を背に南側を向いて座れば、太陽が昇る東面は皇帝から見て左側、太陽が沈む西面は皇帝から見て右側となることから、登る（左手の東方角）＝左上（は陽）、沈む（右手の西方角）＝右下（は陰）の相待（対）関係が生まれた。生んだというのが正しいのだろう。

しかし、本来、東西南北の方角に優劣はないのだから、東西軸重要視と言っても東西に優劣はない、南北軸重要視と言っても南北に優劣はないのであるが、文明が開かれる過程において人間が「もの・こと」に意味付けを図る中で、意味分節に優劣の序列を付加・付与して来たものであろう。

図(表)－1

関連して星信仰が気になる、^(前)北極星・北斗七星を神格化した妙見菩薩信仰との関係、若き日の空海が修した虚空蔵求聞持法において重要視した^(後)金星——明け方に東の空に輝く時は「明けの明星・啓明」、夕方に西の空に輝く時は「宵の明星・長庚」——を神格化した虚空蔵菩薩信仰と関係もあるように見える。

フリー百科事典『ウィキペディア』より	真言宗御室派総本山仁和寺 HP より
 亀に乗る妙見菩薩 『仏像図彙』より	 虚空蔵菩薩
図－2	

図－2、それぞれの像容は他にも様々な形があり一定していないということだが、右手に錫杖・剣らしきものを、左手に宝珠らしきものを持っている状態は共通する。するとこの状況は地蔵菩薩像とも酷似していることになる。そこで、「北を背に南面す、と、星信仰」という状況と合わせ鑑みれば、「高・清フレンドリー古道」域^{くなど}「来名戸神」においては地蔵菩薩というよりも、妙見信仰と結び付いた妙見菩薩、あるいは虚空蔵菩薩を模したものではないか？ とも思うようになった、果たして、奉納者は何を意図したのだろうか。

なお、北極星を背にすることに着目しようが、里において北極星に向かうことに着目しようが、いずれにしても、妙見信仰に繋がるものを思う。

どのような事情があったのか、今となってはどれが正しいのかは断定出来ないが、推理・想像においてはとても興味深くなる。

2. 中国神話の「伏羲^{ふくぎ}と女媧^{じょか}」

銀河系の宇宙を形作った設計者は、伏羲（男神）と女媧（女神）によると云えている。図－3ab は、天理大学附属天理参考館のサイトから拝借したもの。中国・新疆ウイグル自治区トルファンのアスターナ古墓から出土した「絹本着色伏羲女媧図」——1300 年以上前の絹絵である。同 a は原図だが、傷みが激しいために模写的アレンジしたのが同 b である。同図に向かって右側（当人からは左側）は伏羲^{ふくぎ}（男／

陽)、左側(当人からは右側)は女媧(女/陰)という。上半身が人間、下半身が蛇身で互いに尾をねじって絡み合わせる姿を以ってしめ縄状で表現されている。なお、ネットには同図cのように様々なものが載っている。二神の頭上には太陽(日)と思われる天体があり、蛇尾の間には月(太陰)と考えられる天体も描かれている、それらの周囲には星と考えられる小円が並び、北辰(北極星や北斗七星)と思える星も表現されている。



図-3a

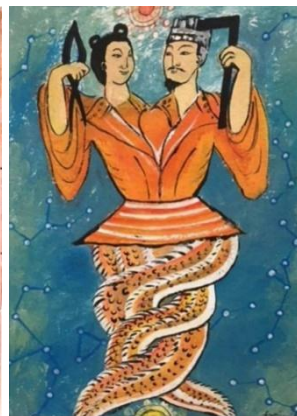


図-3b



図-3c

3. 「日と月」の初め

中国古典『淮南子』には、北極星を神霊化した最高神の太極(太一)は宇宙創成を担い、軽い澄んだ陽気を集積して『火』とし、その火の精が太陽(日)となった。重く濁った陰気を集積して『水』とし、その水の精は太陰(月)となった。天上ではその日と月の陰陽が混交・組み合わせられて木火土金水の五惑星が生まれ、地上では木火土金水の五元素(五行)が生まれた、とある。

『易経 繫辞伝(下)』には、「日往けば月来たり、月往けば日来たる。『日・月』相推して明生ず。」(昼の明かりは日が担い、夜の明かりは月が担う。)とある。

なお、月に「朔(欠け)望(満ち)」がある、本当は『月』自身は発光している訳ではなく、太陽『日』の光を受けている、反射しているものである——彼光体であり、反射体である——が、古代人にとっては、明るさを認識した時は、月自ら発光しているものと見えていたことであろう。

4. 吾が国神話における国生み

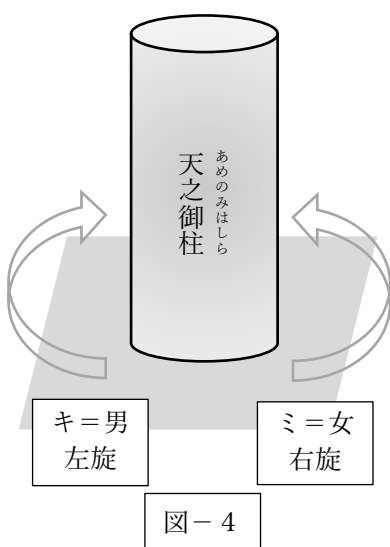


図-4

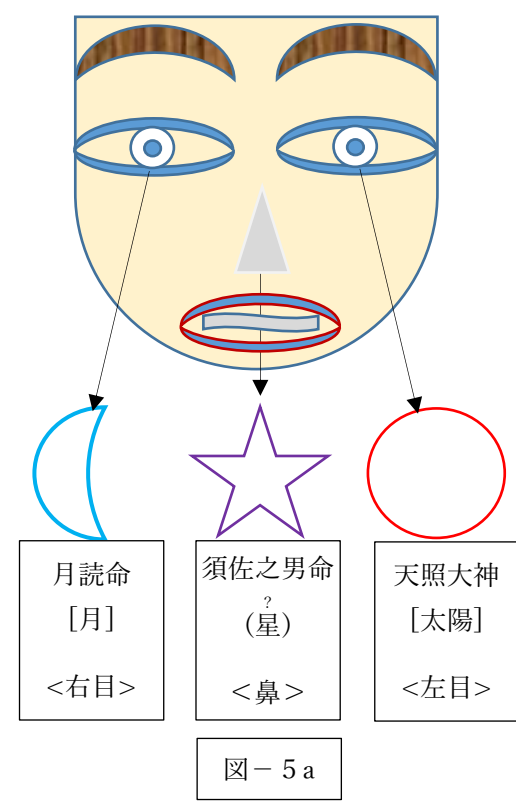
吾が国の記紀神話における国生みは、伊邪那岐命(男神)と伊邪那美命(女神)がオノゴロ島に降り立ち、天の御柱の下で国生みをする際の儀礼において、同柱を回る左右の方向と、言葉を掛け合う順番が問題になったとしている。初め(先)に女神であるイザナミから男神のイザナキに声をかけたら、不具の子ヒルコに生まれたため、葦船に入れられオノゴロ島から流してしまう。今度は逆に、男(夫)が先に声をかけて、女(妻)が後に随ったら上手くいったという。図-4はそのイメージであるが、柱に抱き付く姿勢なのか、柱に背を向ける姿勢なのかの問題意識である。記紀には明確な描写はないが、柱を巡るということからは視線を柱の方に向けて、つまり柱を視界に入れながら回ることが一般的な見方という。二つの命題がある。一つ目は回る向きで、**男は左旋(陽)、女は右旋(陰)**を正統化している。

二つ目は声掛けの順番で、**先に男、後に女**を正統化している、いわゆる「夫唱婦随」である。もちろん、陰陽二元対応となっている、左=陽・先=男、右=陰・後=女の配当である。

5. 吾が国神話における三貴子

図-5a、そのイザナギとイザナミが国生みの後に生んだ神々について、**左目(陽)**から生まれた天照

大御神と、**右目（陰）**から生まれた月読命に、間の鼻から生まれた須佐之男命を加えた三貴子の登場を華々しく物語っている、その後の歴史上では、天照大御神は仏教の大日如来と習合するなど至る処に登場するものの、月読命は後の展開に殆ど登場しない、しかし、民間信仰・民俗においてはきちんと重要視されて来た。（記紀の中では入り組んでいる処はあるが・・・） **天照大神は昼と大地——（陽）**を統べ、**月読命は夜と海原——（陰）**を統べよとなった。神様の左右両眼から生まれた日と月は、天体神格化の象徴でもあり、まさしく天空の両眼と見做される。



図－5 bc、戸矢学著「ツクヨミ 秘された神」(河出書房新社)を参考に、三貴子と言え、皇統の証であり、かつ、日本国最高峰（究極）の宝物である三種の神器を体現している、両者（三貴子と神器）は表裏一体の関係にあり、対応関係は同 b のとおりである。同 c はウィキペディア (Wikipedia) よりは拝借したもので想像図とある。その根拠は記紀にあるとされるが、諸説あるようだ。**勾玉は三日月の形象に酷似する**、上下左右反転させて突き合せると同図 d のようになり、陰陽二元魚眼太極図と重なる。

宮中においては三種の神器を奉斎しているが、今ある鏡と剣は代用品で、勾玉のみが実物とされて有史以来天皇の傍に保管されて来たという。それほど大事にされて来た、とりわけ**勾玉と一体の月読命は月山の祭神として崇め祀られて来た**のである。すると、記紀においては後の展開に殆ど登場しない月読命は、天皇皇統の象徴三種の神器の一つに入っていることは面目躍如という気がする。

		月読命	須佐之男命	天照大神	三貴子
		八尺瓊勾玉 やさかにのまがたま	草薙劍 くさなぎのつるぎ	八咫鏡 やたのかがみ	三種の神器
		宮中	熱田神宮	皇大神宮 (伊勢の内宮)	所在(奉斎箇所)
図(表)－5 d	図(表)－5 c	図(表)－5 b			

てんえんちほう
6. 「天円地方」

その 1 ; 前記図－3 において、本体における左側の伏羲・男は左手に「矩（曲尺）」を持ち、右側の女

媧・女は右手に「規（コンパス）」を持つ姿で出会った。「矩（曲尺）」は正確な正方形（・・・四角・方形）を、規（コンパス）」は正確な円形（・・・円弧・曲線）を描く際に不可欠な道具であり、測量技術に最小限必要な道具と重なる。

夫婦は相和合し、その道具を以って、下の四角の大地（陰）と上の丸い天球（陽）とを創造した。そこから宇宙は「^{てんえんちほう}天円地方」と言われるようになった。「もの・こと」の調和を維持していく権能を象徴していると云われている。円形と方形（四角）に係る内接と外接の関係図は図-6のとおりに二通り有り得る。両者は別々に意味合いを為したり、合わせて意味合いを為したりする。地球は丸い訳だが、あくまでも大地（区画された土地、大地の土地は四点を以って形作られ、区画されてそこに価値を持つ）という見方である。逆に、上の天を象徴するものに円形を当て、下の地を象徴するものに四角を当てた、とも言える。

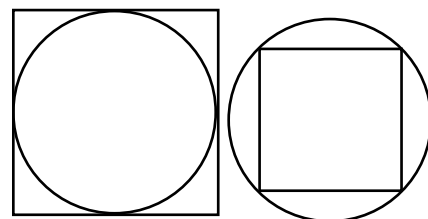


図-6

その2；伏羲と女媧の関係性を再掲するが、陽の男が^くサシガネ・矩^{（かねじゃく）}を持ち、『方・四角□』の機能を使って地を設計し、陰の女が^きコンパス・規^{（ぶんまわし）}を持ち、『円・丸○』の機能を使って天を設計したことになる。このことと陰陽二元基本形とを対比的に図(表)-7のとおりに記述する。

二元 基本観	二元	陽（A）		陰（B）	
	性	男		女	
ふくぎ 伏羲 と じょか 女媧	――	ふくぎ 伏羲（男）		じょか 女媧（女）	
	道具	（陰相）	サシガネ	コンパス	（陽相）
	幾何		方・四角□	円・丸○	
	宇宙		地	天	
	空間識別		（下）	（上）	
―――		C		D	

図(表)－7

図(表)-7

以下は私説（持論）である。根本二元の陽（A）はCにおいては陰相を示し、根本二元の陰（B）はDにおいては陽相を示し交差している、矛盾（対立）していると見られる。しかし、これは陰陽二元の自然原理を表している。幾何の円（陽）も四角（陰）も元を正せば直線である。また、図-3の下半身のねじれ状のものも元を正せば直線である。この場合の直線は陰陽に属さない、陰陽合一の中生物の意味合いである。また、ねじれは180度反転、つまり、陽⇒陰（および陰⇒陽）の交換を意味する。

このことから、陰の女媧(女)には反対の陽を象徴する天（円・丸○）を描くコンパスを持たせ、陽の伏羲(男)には反対の陰を象徴する地（方・四角□）を描くサシガネを持たせて、あえて（意図的に）陰陽交換を演出したものであり、すなわち、陰陽交合を経て、以って、原初の天は陽に収まり、地は陰に収まり、男女はそれぞれの陽と陰に収まり、それぞれの機能を発揮し二元は調和を図るものであるという訓えを表現したものと思っている。要は「陰中陽あり、陽中陰あり」の陰陽二元説を奥深い巧妙な仕掛けを以って組み込んでいると感嘆している。

形との関連から見る。あらゆる物の形は大きくは曲線的なものと直線的なものに分類出来る。さらに基本形としては、三角形（正三角形）、四角形（正方形）、円形（丸）の3つである。三角形はいろんな処に

登場するが、天地開闢・天地創造における説明要素としては円形と四角が最も適切であるとなったのだろう。円形は天球の円球と同相同価である、四角形は大地の立方体と同相同価である。

関連で宇宙創成に係る老子には有名な一説、「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて陰陽と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一（^{いつ}）は二（陰陽）を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」とある。よって、三角形は万物生成の胎動基点であって、生成された万物の最初は四角形ということになる。それからの化育生成は五角形、六角形・・・無限形に発展するが、無限形は円形である。ここに天地を持ち出し、よって最下部の地（四角形）と最上部の天（円形）が当てはまったということではないかとも想像している。

第Ⅱ部 「^{さじょう う げ}左上右下」思想と日月の実際例

その1；図－8は「<https://www.wikiwand.com/ja>」より拝借した天皇礼服のこと。孝明天皇（^{こうめい}明治天皇

の父）の^{こんえ}袞衣、あるいは、^{こんい}こんいという。これは天皇の最高祭服で、前側、左右の肩に日月が、背中側首の所（後ろ衿の下）には北斗七星（星辰）が大きくはっきりと描かれている。天皇即位の儀礼や大嘗祭は天皇の王権を象徴する代表的な儀礼であるが、その場（時）に限って着用されたものである。着用する天皇は北極星の身（立場）で、前面の頭に近い方に宇宙の両眼なる「^ひ日（三本足鳥／背景は赤色）」を^{ひきがえる}左肩に、「^{つき}月（蟾蜍と兎／背景は白色）」を^う右肩に、後面（背面）で頭に近い方に北斗七星を背負う形となる。なお、この日・月・星辰三体の意味合いは「照臨無私」で、^{しょうりん}照臨とは、太陽や月が下界を照らす意から、

- ・神仏が人々を見守ること（照覧）
 - ・君主が国土・人民を統治すること（君臨）
- などの意味であるとされる。

したがって、私心無く、無償の愛を以って国土・人民を統治することの意を表現している。なお、元は中国皇帝の専用漢服、礼服の一種で「天子御礼服」とも称される、配置された文様は、細部について日本風にアレンジしているという。

その2；わが国において国家法典が完備したのは701(大宝元)年、大宝律令の完成による、律は刑法、^{りょう}令は行政法を意味する。その体制（行政組織）を^{だじょうかん}太政官といい、最高官職を「太政大臣」（今の内閣総理大臣）とし、その次に「左大臣、その次に「右大臣」を配置した。なお、太政大臣に適任者がいないと空席でもよいという職だったため、実質的には、**左大臣が最高役職**であり、右大臣は補佐的な役目（今の副総理）であった。このようなことから**左大臣が上、右大臣は下の格が慣例（習慣）化した**。



図－8

その3；寺院においては、図－9aのとおり、仏の守護神たる仁王像は、本体から見て**左側に「阿（陽）像／言葉の初め」、右側に「吽（陰）像／言葉の終わり」**が配置されている。神社においても、同図bのとおり、守護神たる狛犬は、本体から見て左側に「阿（陽）像」、右側に「吽（陰）像」が配置される。



図－9a

その4；図－10の庚申信仰の掛け軸を紹介する。私の町内会の知人宅に伝わる物である。ここにおいても頭部に宇宙の両眼「**日と月**」を配している。本尊から見て**左上に日、右上に月**の配置である。



図－9b



図－10



図－11

11を紹介する。同図は、山形県西川町旧本道寺（真言宗）門前集落の元宿坊「^{いちみょう}一明坊」に伝わる（所蔵の）門外不出のものである。最下段に弘法大師自らが彫刻したと記述された「南無阿弥陀仏」の刷り物の掛け軸である。最上部**左右に「日と月」**を配している。

その6；図－12は、自宅から直線距離120mほどの場所にある「（宗）月山神社」（祭神は月読命）境内にある献灯である。燈明（ローソク）を立てる穴の両側には、各柱に、日と月をモチーフにした彫り細工が施されている。**神殿から見て左に日、右に月**である。

その7；薬師三尊のこと、薬師如来を中尊とし、本体の**左脇侍に日光菩薩**を、**右脇侍に月光菩薩**を従える三尊形式である。根拠は「薬師瑠璃光如来本願功德経」、通称「薬師経」である。有名なのは図－13のとおり奈良「薬師寺」のものである。

その8；山形市岩波地区の石行寺境内に図－14のとおり「宇賀神」と刻された石祠がある。これにも祠の中

の神から見て**左に日輪を、右に月輪を彫刻**している。

その9；密教曼荼羅絵図の揭示の仕方を取り上げる。寺院本堂内に垂下揭示する場合の向きは図-15aが標準形である。参加者が寺院の本尊に向いた場合に東側・右手に胎蔵界を、反対側の西側・左手に金剛界を垂下する。**本尊から見ては、左手に胎蔵界を、右手に金剛界を配置**する。難解なことはさておいて確



図-12a；月は西面



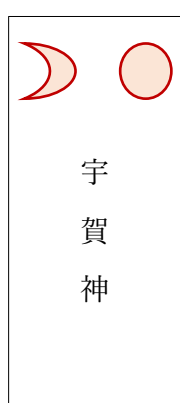
図-12b；日は東面



図-13



図-14



認しておくことがある。胎蔵界は密教の根本的思想・教義を成す大日経に依って立ち、金剛界は密教における実践面を重要視する金剛頂経に依って立つものである。大角修著「大日経 金剛頂経」(講談社学術文庫) P15 には「・・・大日経と金剛頂経は、大日如来(大日尊)が姿を現し、金剛薩埵(金剛尊)という菩薩に直接に言葉をかけて教えを説くという内容である。・・・」教師(大日)と生徒(金剛)の関係にも見える。どちらが上位かという優劣は一概には言えないのは当然としても、諸本に目を通した私の印象では、より重要視の面では胎蔵界ではないのかと考えている。なお、同図bはaを南北反転して見たものである。

他にもたくさんの適用事例がありここで閉めることとする。

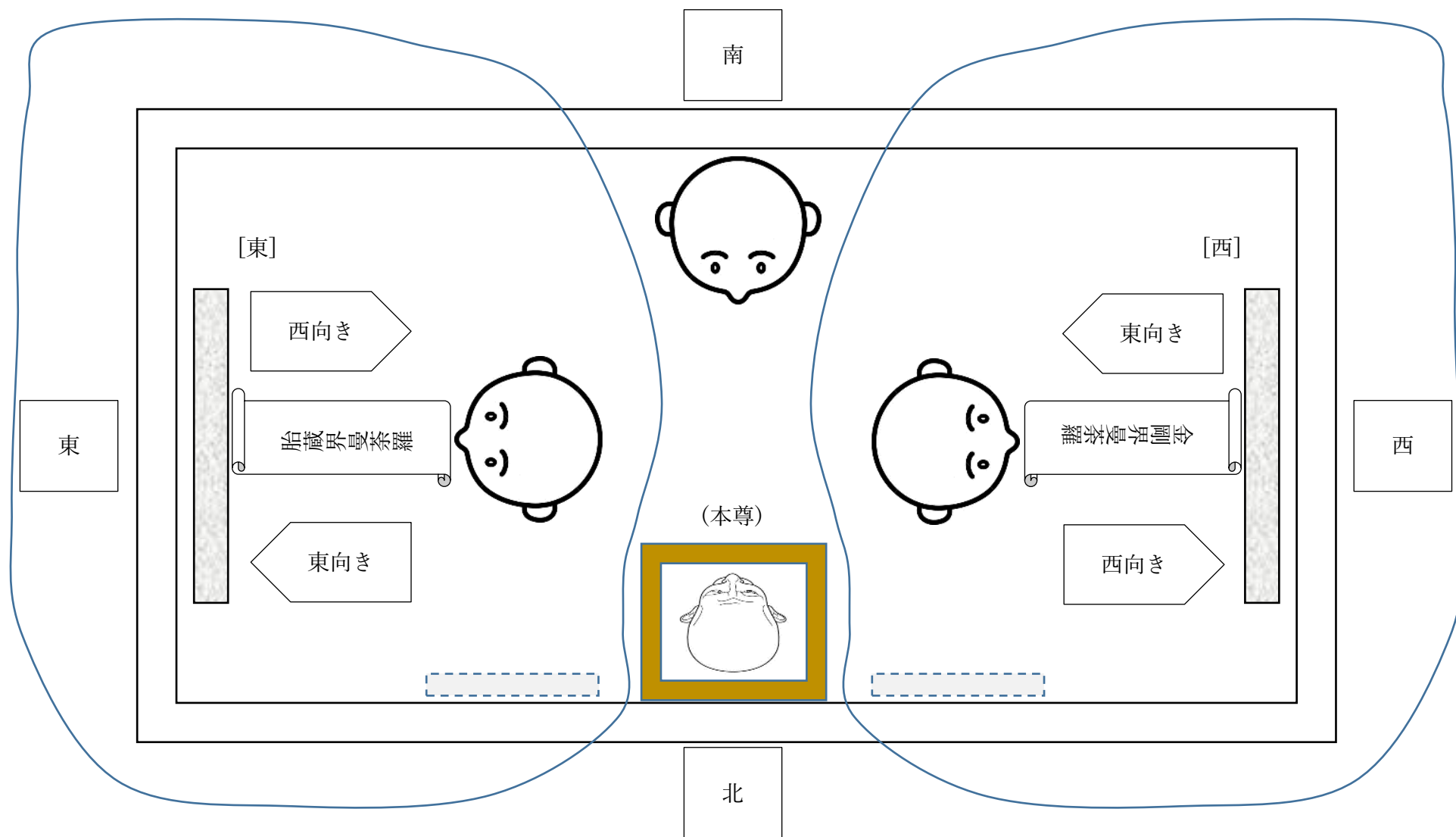
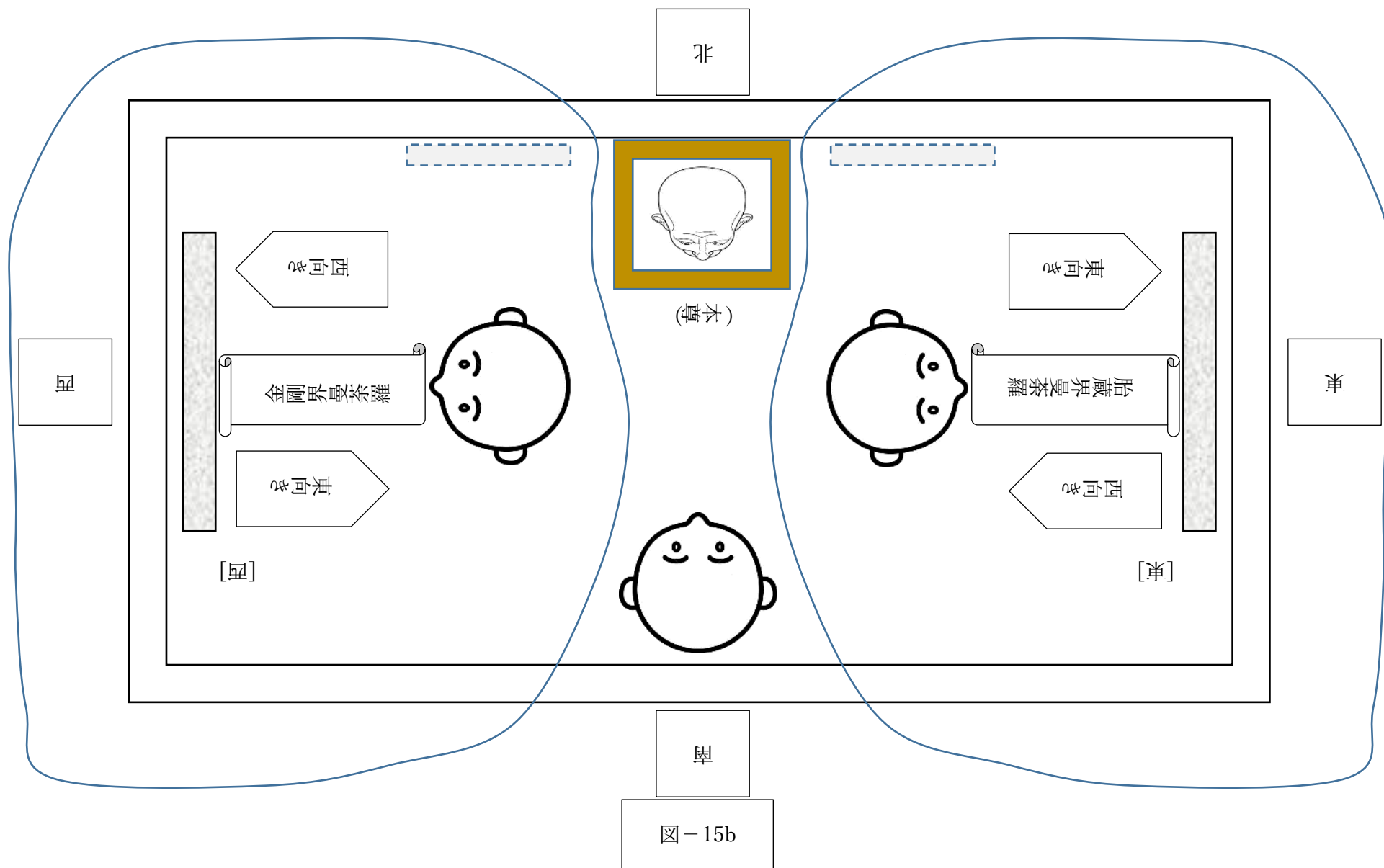


図-15a



[関 連]

さて、左上右下のことから少し外れるが、日月並立のこと、古文書や石碑などに、あるいは諸行事において、「^{てん げわじゅん}天下和順、あるいは、^{にちがつしょうみょう}日月清明」の言葉を多々使って来たがその意味合いについて浄土宗大辞典 WEB サイトから図(表)－16 に取上げる。阿弥陀仏信仰を説く浄土三部經のうちの「無量寿經」の一節にあり、^{しゆくしょうもん}祝聖文という偈文で慶事（お祝い事）に用いる御經である。逆説的に言えば、一人ひとりが^{しゅうとくこうにん}崇徳興仁 ^{むしゅらいじょう}務修礼讓を実践すれば、天下泰平の世の中になるという。中国古典「礼記」大学にある^{しゅうしんせいかけこくへいてんか}「修身齐家治国平天下」にも通じる訓えを感じる。

てん げわじゅん にちがつしょうみょう ふうう い じ さいれい ふ き <u>天下和順</u> <u>日月清明</u> 風雨以時 災厲不起	こくぶみんなん ひょうがむゆう しゅうとくこうにん むしゅらいじょう 国豊民安 兵戈無用 崇徳興仁 務修礼讓
天下和順し、日月清明なり、風雨時を以って、災厲（災害と疫病）起こらない、そうなれば、	国豊かに、 ^{たみ} 民安んじ、兵戈用いることなし、徳を ^{あが} 崇め仁を興し、務めて礼讓を修すべし
ぜん かだ 前伽陀	ごばい 後唄
(仏様の赴くところは) 天下は泰平となり、太陽も月も清らかに輝き、時季よく雨が降り、程よく風が吹き、災害や疫病も起こらない。国は豊かに栄え、民の暮らしは安らかとなり、武力を行使することもない。(人々は他人との違いを認め合い) 他人の善いところを尊び、互いに思いやりながら、努めて礼儀正しく振る舞い、また譲り合うものである。	
図(表)－16	

図－17 は、市村幸夫さんより拝借した資料である。同図 a は飯塚村（現山形市）の岩田家に伝わる吉左衛門（休造）の日本廻国（六十六部）満願成就に係る紅花染 幟 旗（^{のぼり}幟 ^{はた}旗）である、また、同図 b その満願を踏まえた供養塔石碑であり、「天下和順・日月清明」がしっかりと書かれている。天下の和順はそもそも日月の清らかな明かりが齎すもの、という報恩感謝の日月信仰が基層に流れている。



以上に共通するのは、本尊・本体から見て左側に日（太陽）・陽を、右側に月（太陰）・陰を配置していることであり、初源を辿れば陰陽二元相對（待）性原理である。これらから分かるように、左上右下とはいうものの、左は右があつてのこと・右なくして左はなし、上は下があつてのこと・下なくして上はな

し、並べて比較したが故に生ずる相対配置であって、陰陽二元の発展系であることから、左右・上下において本質に差異はないのである、統合的調和の観点からは必要な相補関係にあるものなのだ。相補関係とは、世の中のあらゆる事象の「もの・こと」のどちらか一方に陰（あるいは陽）を配当すれば、他方に陽（あるいは陰）が、つまり、反対相が自動的に自生・自発し、以って、如何なる条件下であっても陰陽が瞬時に両立することからは、その陰陽に価値の優劣は判定・断定できない、勝負は永遠に付かないという教訓が読み取れる。

ところで、月は自ら発光せず太陽から光を受け貰って反射しているに過ぎない、しかし、月は“俺に光をもっと強く当てよ”とか、“24時間ずっと輝かせよ”とか、“立場を入れ替えよ”などという愚痴は言わない。万葉集等において「月」が「日」よりも頻繁に詠まれていたのは、受け身ながらも存在感を少しでも覗かせるといふ月の持つロマンチック性や一歩引いた奥ゆかしさのイメージは日本人の気性にマッチするからであろう。私も少しばかりの自負や僅かばかりの矜持はある・・・、それをいいことに太陽になったつもりで大威張りの吾身を恥じるばかりである、自戒自戒・・・。

昔は現在のような科学的根拠を以って、天体の動きを解明出来た訳ではなかったであろうが、古今東西、老若男女問わず、天空の規則正しく摩訶不思議な諸現象にはただただ畏敬の念を持ったのはごく自然なことである。日・月^{にち げつ}は天空^{うら}にあってその個性を担いつつ双方相まって——同格意識で見た——地球に対して日照降雨・風雨順時^{うるお}を潤し、ひいては五穀豊穰と子孫繁栄を育む慈愛の源泉、天地を見守る天空（宇宙）^{まなこ}の両眼として崇拜・崇敬・信仰の対象となって来たのであろう。

ところで、上記のとおり「満ちては欠ける、欠けては満ちる」月（太陰）は日陰の存在ではあるが、人生訓にはとても重宝な存在である。

「満ちては欠ける」⇒

成功し絶好調は永遠ではなく、やがては衰退して行くものである。
増上慢・傲慢は、まもなく（やがては）凋落するものだ。

「欠けては満ちる」⇒

失敗し意気消沈しても永遠ではなく、やがては成功のチャンスは来る。
謙虚、自戒・自省を心底念ずれば、必ずや他者承認を得られるものだ

陰陽（功罪）両面があるからこそに希望と期待が生まれるものである。

(end)